

「完全な現在の生活を味あふ」とはどういうことか

——宮澤賢治、最後の手紙を通して考える——

辻 厚 治

(一)

一九七六（昭和五二）年に筑摩書房から出版された『校本 宮澤賢治全集』の第一三巻に、四八八という書簡番号がついている手紙があります。賢治が花巻農学校時代の教え子柳原昌悦にあてたもので、一九三三（昭和八）年九月一日に投函されたものです。彼が九月二一日に急性肺炎で亡くなっているのを考えれば、死の十日前に書かれた最後の手紙だということができるとでしょう。書式は封書であり、表書きは稗貫郡亀ヶ森小学校内 柳原昌悦様となっています。それではその内容を読んでみよう。

八月廿九日附お手紙ありがたく拝誦いたしました。あなたはいよいよ元気なやうで実に何よりです。私もお蔭で大分癒つては居りますが、どうも今度は前とちがつてラッセル音容易に除こらず、咳がはじまると仕事もなにも手につかずまる二時間も続いたり、或は夜中胸がびうびう鳴って眠られなかったり、仲々もう全い健康は得られさうありません。けれども咳のないときはとにかく人並に机に座って切れ切れながら七八時間は何かしてあ

られるやうになりました。あなたがいろいろ思い出して書かれたやうなことは最早二度と出来さうありませんがそれに代ることはきつとやる積りで毎日やつきとなつて居ります。しかも心持ばかり焦つてつまづいてばかりあるやうな訳です。私のかういふ惨めな失敗はただもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過つて身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かにぶんのからだに付いたものでもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しめ、同輩を嘲けり、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却つて完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かがむなく過ぎて漸くじぶんの築いてゐた蜃気楼の消えるのを見ては、ただもう人を怒り世間を憤り従つて師友を失い憂悶病を得るといつたやうな順序です。あなたは賢いしかういふ過りはなさらないでせうが、しかし何といつても時代が時代ですから充分にご戒心下さい。風の中を自由に

ができるとか、じぶんの兄弟のために何円かを手伝へるとかいふやうなことはできないものから見れば神の業にも均しいものです。そんなことはもう人間の権利だなどといふやうな考では、本気に観察した世界の実際と余り遠いものです。どうか今のご生活を大切にお護り下さい。上のそらでなしに、しっかり落ちついて、一時の感激や興奮を避け、楽しめるものは楽しみ、苦しまなければならぬものは苦しんで生きて行きませう。いろいろ生意気なことを書きました。病苦に免じて赦して下さい。それでも今年は心配したやうでなしに作もよくて実にお互い心強いではありませんか。また書きます。

この手紙の日付はさきほども述べたように一日で、この時賢治は結核で病床にあります。石灰肥料の普及によつて農作物を増産したい、ひいてはそれで農民の生活を豊かにしたいという願ひを持っていた賢治は、彼に広告原稿の添削を依頼してきた東北砕石工場の鈴木東蔵に承諾の返事をだしたのみならず、みずから石灰肥料販売に協力し、資金繰りのための融資先すら紹介しようとするのです。砕石工場の経営をなんとか軌

道にのせようと、セールスにでは雨風に打たれ、肺炎をおこして発熱する。すこしよくなるとまたセールスに……。ということの繰返しであったという。彼がなぜそれほど異常なまでにその仕事にのめり込んでいくのかという分析は、矢幡 洋の『賢治の心理学——献身という病理——』（彩流社）を読んでもらうとして、ここでは彼が「咳がはじまると二時間も続いて仕事も何も手がつかない、夜中に胸がびうびう鳴って眠れない」状態にあることがわかれたい。

一九三三年九月一七日（日）から三日間は賢治の住む花巻町、鳥谷ヶ崎神社のお祭りである。この年は、岩手県はじまって以来の豊作であり、近在の百姓たちも波のように浮き立って町を流れ歩いたという。その様子を新聞記事から引用すると、次のようである。この日は「快晴に恵まれ折柄日曜日だったので近隣町村からの人出は三萬と稱され大賑はいを呈した……夜を徹して大混雑を呈し花巻署では署下署員を総動員して不寝の番で取締に努めた」（昭和八年九月一八日付「岩手日報」）と報道されています。息をするとせいでいという音が聞こえるような、またいったん咳がはじまると二時間も続くような状態にありながら、それでも賢治はこの光景のなかに身を置きたいがために、二階から店先へ降り（他人の手をかりて）、祭りの賑わいを終日楽しんでたという。多分、前々（昭和六）年の凶作から少しばかり回復し、どうやら息をつくことができるようになって、安堵している農民たちの喜びとともに味わいたかったのでしょう。

翌一八日、神輿は朝神社を出て町内を練り歩く。賢治はこの日も門のところまででたり店先に座ったりしながら、楽しみにざわめき通る人びとや鹿踊りを見ていたという。一九日、この日夜半、神輿は近くのお旅

屋（神社を出た神輿が泊まる場所）をでて、早晩、丘の上の神殿へ還御する。これを見たいといいだしたので、みなで手伝って二階からおろした。彼は門のところへ出ていって、待っていたという。東北の秋は夕方になると冷気があたりを包む。母イチに「賢さん、夜露がひどいんじゃない。引っこまってやすんでいる方がいいんじゃない。ほんとにいいんじゃないか」との注意をうけるが、彼はうなずき「だいじょうぶ、ええんすじゃ」と答え、夜八時、神輿をお迎えすると拝礼して家に入ったという。二〇日、前夜の冷気・夜露がこたえたのであろう、呼吸が苦しくなり、容態は急変した。急性肺炎と診断された。翌二一日、体力が衰えていた賢治は母イチのさしだす水をうれしそうに飲み、オキシフルをつけた消毒綿で手をふき、首をふき、からだをふいたのち、潮がひいていくように息を引き取ったという。午後一時三〇分。

このように、死をむかえるしかない、いなむしろ死へとひたすら傾斜していくようにしか思えない彼であった。その彼が死の十日前、二十一日に書いた手紙を問題にしようと思う。私はここで、手紙のなかにその傾斜ぶりが窺えるなどというのではありません。手紙の内容は読めばわかるように、自分の病状を淡々とべながら、自分自身のこれまでの来し方を振り返えり、そこからかつての教え子にむかつて語りかけるのです。手紙にある「また書きます」という最後の言葉からすれば、賢治自身このあと十日後に死んでしまうなどとは思っていないようですが、手紙を読んだ印象からいうならば、（死を覚悟した人の？）澄みきった響きが聞こえてくるように感じられます。

(二)

私が賢治にこのような手紙があることを知ったのは、滝沢克巳の『現代教育の盲点——宮澤賢治晩年の手紙によせて——』（へもともとは一九七二（昭和四七）年の『理想』四六七号（教育特集とうたっている）に寄稿した論文ですが、のちに法蔵館より出版された『哲学は何のためにあるか』に収録され（一九八二）、さらにそののち創言社より出版された『朝のことば』に収録されている（一九九二））を読んだときである。滝沢による賢治の手紙の分析にはのちほど触れるとして、いまは賢治の手紙だけを問題にしよう。

i、「憂悶病」へ傾斜していくこと

手紙のなかに「風のなかを自由にあるけるとか、はっきりした声で何時間も話ができるとか、自分の兄弟のために何円かを手伝へるとかいふやうなことはできないものから見れば神の業にも均しいものです」という箇所があるが、彼はこの「神の業にも均しいもの」という言葉をどんな意味で使っているのだろうか。この検討から始めることにしよう。

この時の賢治の状態は、「咳がはじまると仕事も何にも手につかずまる二時間も続いたり、或は夜中胸がびうびう鳴って寝られなかったり」する状態です。石灰を作る東北砕石工場をなんとか軌道に乗せようと、セールスに出では雨風に打たれ、肺炎を起しては発熱する。それで少しよくなるとまたセールスへ出るというたことの繰返しで、いま、結核を再発して病床にあります。そんな彼からすれば——思うことの十分の一もすることができない、寝たきりの状態にある彼からすれば——「風のなかを自由に歩けるとか……」は「神の業にも均しいもの」と映った。できないものからすれば、そう映ったとしても不思議なことではな

いでしよう。賢治はもう、二度と再び「全い健康は得られさうも」ないことがわかってみて、それがどれだけ有難いことであつたかが初めて分かつたのです。

ところが世の人は、そうしたことが何の苦もなくすつとできる「完全な現在の生活を味あふ」こともせず、そんな自分を有難いと感じ、喜び、感謝して生きようとするどころか、「そんなことはもう人間の当然の権利だ」などと考えている。「風のなかを自由に歩く……」などといったことはやろうとすればいつでも、どこでもできることだし、私だけでなく他の誰でもができる、当然過ぎるぐらい当然なことではないのです。

だからそんな誰でもができる当たり前のことだけでは、とうてい満足することができない。この世の中で胸を張り自信をもつて生きていくためには、誰にもまして優れた才能や体力、容貌とくに美しさがなければと考えてしまうのです。このようにして私たちは、生命がそれとしてこの世に生をうけ、生まれでて、健やかに育つていくために、なににもまして不可欠とされていたこと、「生命」そのものが無条件に肯定されていた事実——「お前がそこにいてくれるだけでいいよ、ほかにないもいらないよ」という抱きかかえ——を忘れ去ってしまうのです。お腹の中にいる胎児は、これから生まれ出るであろう世界がどのような相貌と様相を呈しているか、自分の誕生をどのように感じ、受け入れようとしているのかを直接自分の目や耳で確かめることはできません。しかし母親の心身の動きを通して、これから生まれようとする世界が自分をどのように迎えるかを知ることができるのです。たとえ世界が母親を日常的に忙しく緊張せしめるようなものであつたとしても、基本的なところで、彼女をしてゆつたりとその緊張や強ばりをほどかせるようなもの

のであるとするならば、つまり母親が彼女をとりまく世界とどこかしら親和的な関係を生きているならば、そうした母親の安らぎや穏やかさ、和みは胎児にそのまま伝わっていくであろう。

さらにまた生まれてからも、家庭という場所で赤ん坊はいわば無条件で——言うことを聞いたからとか、おりこうさんにしたからといった条件や理由なしに、ただそこにいるというそういう理由だけで——親の世話を受ける。私たちは、大きすぎず鋭すぎない優しい声の調子であやされ、声をかけられ、身体をまさぐられ、乳首を含まされ、便で汚れたお尻を拭いてもらい、顎や脇の下、指や脚のあいだをていねいに洗つてもらつたという経験があるであろう。こうした赤ん坊のときの「記憶」——お腹がすいて泣けば「ああ、お腹がすいていたのにごめんね、気がつかなくて」とやさしく抱き上げられ、乳首をふくませられ、かすかに伝わってくる母親の心臓搏動のリズムを感じながら、腹いっぱいになるまで飲むことができた——「記憶」は、自分を守り欲求をみたしてくる存在である母親と、お乳の匂いや味や、口や舌を使ってむしやぶりつき吸いつくという、身体を通じた触覚や味覚との動きの文脈のなかで、成り立ってゆくのです。

こうした存在（生命）まるごとの肯定、受け入れ、抱きかかえの記憶が生きていけばこそ、ずつとあとになつてから、母親（あるいはもっと広くとれば、養育者）を安全な基地にして、謎に満ち溢れた外の世界に冒険の旅にでかけることができるようになるのである。くりかえし述べるように、この私の生命がまるごと肯定されている、「お前がそこにいて、笑つていてくれるだけで仕事の疲れなんか消えてしまうよ」、「そこにいてくれるだけで、私たちは温められ、慰められ、

癒され、生きていく勇気が湧いてくるんだよ」という全的な受け入れこそが、私がこの世でもろもろの人やものとの関係を生きていき、のびやかに生きていくための必要不可欠な条件、舞台であるのです。幼児は確かにその条件を条件として生きることの幸せを心身全体に顕わし出してだして、泣いたり笑つたりしています。そんな意味では不可欠なものをそれとして生ききつているといえるでしょう。

ところがしかし、もうすこし時間がたつて三、四歳ぐらいになつたとき、私たちは自分自身を俯瞰して見るような位置に視点を移すことができるだけでなく、自分から離れた他者の視点から自分の身体像を突き放して想像することもできるようになります。その時期から私たちは、どこかしら自分自身と他人との在り方を比較し始めるのです。そのこと自体はけつして悪いことではない。というより、成長することの大きな一歩だといえましょう。というのは、それまでは与えられた環境に身体として適応し、その環境をそれなりに消化していくことはできた。たとえば母親（あるいは父親、それに類する人々）によって縁取られている環境のなかで着替えとか、用便、食事、歩行、ひとり遊びといった自分の身体に直接かわりのあることはなんとかできてきた。しかし、そうした安定した環境がなんらかの（思いもかけない）事情によって崩れてしまったとき、あるいは崩れそうなとき、それをどうすれば立て直すことができるのかという自分の可能性を探りながら、その意味や因果を相対化して読むことができるためには、さききのべたように自分自身を俯瞰するような視点を手にしていなければなりません。こうした視点を手にすることが、ただちに、みずからの生命がまるごと肯定されていた事実をどこか忘れ

てしまい（足元を抜かして）、他人との比較のなかでしか自分をみることができないようになってしまふのの意味するのではないにもかかわらず……。ひとは、「隣の誰とかはあだとかこうだとかいったり」、私自身についても「自分は相当なものだとか、駄目であるとか考えて得意になったり、憂うつになったりしている」というように、いつのまにかなっていくのです。みずからの生命がまるごと抱きかかえられているという、生命が生命として生きることのできる不可欠の条件はそれがあつて当たり前である、それだけではどうして足りないといった程度にしか思えなくなってしまう。だから、私がこの世で胸を張って、自信を持って生きていくためには、それだけではとても足りない。もつとほかの、他人より大きくて、強くて、優れている「才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふもの」がなければならぬというように、いつのまにかなくなっていきます。

そして、他人より大きくて、強くて、優れている持ち物が何かあれば自己満足し、自惚れ、度過ぎて喜び、私ほどでない他人を「なんでこんな簡単なこともできないの」と蔑み、卑しめ、貶めることによってのみ、私自身をもちこたえることができるように考える。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについてたものでもあるかと思ひ「こんでしまうのです。つまり、もともと私は生まれつき優秀で、何をやらせても器用にやつてのけ、そのうえ他人がおもわず振りかえるような器量良しだし、いつも誰かが声をかけ手助けしてくれるから、他人みたいにあんなふうにあくせく働いたり、こつこつと努力したりする必要はなにもないなどと思ひあがり、自分自身を鍛える、真剣に考えたり、努力したり

することを小馬鹿にするようになっていく。

他人より優れた力がたまたま私に恵まれたとしても、それはただそれだけのことで、なにも鍛えずにいつも真価を発揮できるとはかぎらない。訓練して磨く、研ぎ澄ましていく、他人とともに切磋琢磨していくなかで、さらに磨きがでてくるということがある。他の人やものとの関わりのなかで、私自身が生き活きとすることとさらに輝くということが生みだされてくるのです。

「たまたま何かが他人より優れて、早くできた」ということがあつたとしても、それがつぎの瞬間にもさしたる努力抜きで、さらりと流してこれまでと同じようにできるという保証に決してなりはしない。たまたまうまくやりとげた自分を固定化して、「私はいつでも何をやつても上手にこなせるのだ」と鼻高か天狗になって、次々と変わっていく事態へ真剣に対応することを軽く見る、馬鹿にする、怠るというのが、「じぶんの仕事を卑しめ、同輩を嘲り、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思い空想をのみ生活して却って完全な自分の生活をば味ふこともせず」ということでしょう。「何をやつてもうまくやれる」という錯覚（「空想をのみ生活し」）のなかに生きて、自分自身を磨く、研ぎ澄ましていくということをおぼえた結果として、世間から取り落とされてしまう（見捨てられてしまう）のです。それは彼にとつて、とても耐え切れないことでしょう。

なぜなら彼には、「かくも実力がある私が、こんな仕打ちを受けなければならない謂れはないぞ」という憤懣がうずまいていくのですから。それで、「幾年かが空しく過ぎて漸くじぶんの築いてゐた蜃気楼の消えるのを見ては、ただもう人を怒り世間を憤り従つて師

友を失い憂悶病を得るといったやうな順序です」というやうなことになる。つまり、私への嫉妬かやつかみか知らないが、「何をやつても上手にこなせる」という実力があるこの私にそれ相応の仕事させない、任せない他人・世間に怒り憤り、いつも憤懣遣る方ないありさまで。他人に会つては「溜まり溜まった日頃」の憤懣をはきだし、怒り憤り、狂い、愚痴りというやうなありさまで。そのうち誰も私を相手にしなくなり（「師友を失い」）。そうすると後はせいぜい、飲み屋で管を巻くか、女房子ども相手に当り散らすかというやうなことになる。そのうち、そこでも相手にされなくなってしまうのが落ちでしょう。どこからも、誰からも相手にされず、自分自身の本当の姿に気づかないまま（気づいていても、本当の自分を見る怖さが勝るゆえ）、鬱々と当て所なく歩き回るしかありません（「憂悶病を得る」）。

さらにつづくわえれば、他人より劣つていて、小さくて、弱いがゆえに、「私にも誰にもまして優れた才能や器量があれば」と思うものの、それをとても手にすることのできない私自身を「どうせ私は所詮この程度の生まれよ」と卑しめ、諦め、身を縮め、みずから努力することを止め、自分に見切りをつけていく。このように、「自分の弱さ、小ささ、劣つていることを強調するそのことが傲慢にはかならない」と指摘したのはかのキエルケゴールです、これもまた絶望の一つの形にはかならないとして（「憂悶病を得る」）。

賢治の頭のなかには、あとにのべたやうな意味での「憂悶病」は含まれていなかったでしょう、たぶん。でも強いて考えれば、賢治はこれら二つを含めて「今日の時代一般の巨きな病」――「慢」と名づけたはずです。「慢」という言葉には「心がのびたるんでおこた

る」とか、「心がおごり高ぶる」とか、「みくだす」とかといった意味があります。「心持ばかり焦ってつまづいてばかりゐる」た「わたしのかういふ惨めな失敗」を振り返り、それが「ただもう今日の時代一般の巨きな病、⁵『慢』といふものの一支流に過つて身を加へたことに原因します」と冷静に自己を腑分けして見せるのです。瀕死の病状にありながら、鳥谷ヶ崎神社の祭礼にあつまつた人々とともに楽しみを共有したいがために、喜びに溢れる祭の高まりのなかにすこしでも身を置きたいとする賢治の姿に象徴されるように、人々——とくに農民の喜びや悲しみに寄り添おうとしてきた賢治です。またたとえば『風の又三郎』という作品にみられるように、いちど書き上げた原稿にくりかえし推敲の手をいれるような彼です。したがってみずからのみを高しとして他人を見下し、蔑んだり、またみずからを磨き、研ぎ澄ませていくことを小馬鹿にし嘲笑い、ひとり悦にいつていたとも考えられません。だとすれば、彼はここで、みずからのうちに「あるいはまた他人のうちに、ほんのちよつとした加減（拍子）でそのように知らず識らずのうちに（いつのまにか）傾いていつてしまう何かを、滝沢が「ただ嗤うべく憐れむべき人間の虚栄」（積極的に実在する何の根拠も原因もなしに、すなわちまつたくの「虚無」から、私たち人間に起こってくるもの）と呼ぶ事実を、同じように、確かに見ていたのだとしかいようがありません。

ii、幼きものへのメッセージ

その何かについてはのちほど触れるとして、彼が柳原昌悦にたいし、あるいはこの教え子のむこうにいる数多くの幼きものにたいし、こうした自己分析のうえから何を伝えようとしたのかと、推測してみたいと思

います。

自己内外の状況如何にかかわらず（外を見れば生きていくのが嫌になるような殺人・殺傷・いじめ・虐待・殺戮・戦争、内を見れば自分自身の弱さ・醜さ・愚かさなど生きていくのを空しく、嫌やだと感じせしめるような事実が多々あつたとしても）、——その人の持つて生まれた力が大きからうと小さからうと、強からうと弱からうと——それぞれが生きる生命を現にこうして与えられていること、またその生命を生ききる力を（それが強ければ強いなりに弱ければ弱いなりに）現に与えられていること、そうした今の自分自身を大切に生きよ、生きて欲しいというのが賢治の奏でる基調低音であり、メッセージであつたのではないのでしょうか。どんなに小さなこと、弱々しいことしかできなくても、自分自身を発揮する力がそこにそうしてあるじゃないか、それを生きよ、小さいからといって弱々しいからといって他人と比べ悲しがる前に、自前でできることがあるはずだ、小さい弱々しいと思ひ込んでしまつているその力を出し切つて生きてごらん、そうすれば自分でも思つてもみなかつた力が湧き出てくるものだよ、というのが彼が教え子柳原昌悦に（最後に）手渡したかつた思いだつたはずです。

だからこそ、瀕死の病床にあつて思うことの十分の一すらもできない賢治の言葉として、「あなたがいろいろ想ひ出して書かれたやうなことは最早二度と出来さうもありませんがそれに代わることはきつとやる積りで毎日やつきとなつて居ります」ということば（決意）が、口をついてでてくるのではないのでしょうか。これは、「風のなかを自由に出来るのか、はつきりした声で何時間も話ができるのか、……」といったことだけではなく、私のように瀕死の病床にあつて、どん

なに小さなこと・弱々しいことしかできなくても、一つの生命がそこにそうしてある、生きる力をあたえられているということは、そのこと自体すでに「神の業にも均しいもの」だという、もうひとつの意味（解釈）につながっていきます。そのことはのちに触れることにして、さしあたつてここでは、彼のような病床にあらうと、どんなに小さなこと弱々しいことしかできなくとも、そうした生命があるということはその生命にともなう力があたえられているということであり、そこでできることがちゃんとあるのだよ、という自己発見（それでしかありえないのだから、それでいいよ、あるがままでいいよという——いまの自分自身の肯定——それは自己の制約を知ることと同時に、制約のなかでなおかつ今の自分にやれることを見つけていではおかないという決意の表明を伴う）の（喜びの）言葉が気負いなく述べられていることに注目したいと思ひます。

私たちのなかには生まれながらに走るのが早い人もいれば、どれだけがんばっても早く走ることができない人もいます。十人人がいれば十人のあいだに差がある、百人いればそのあいだに差があるというのは至極当然の話です。みんな一律に・平等にというわけにはいかない。その違いを嘆いてみても始まらないのは、わかりきつたことです。それがわかりきつていながら、人はつい「あの人みたいに力があれば私もうまくやれるのだけだ……」と考えてしまふのです。

他人と比較して自分自身を生きようとする以前に、自分自身に与えられた生命を・力を尽してごらん、そのうえで、初めて他人との比較も生きてくるのだよ、と呼びかけているように思えるのです。自分はこうしてやってみてうまくいかなかったけれども、他人はこ

んなふうによつてやり遂げた。こんどはそれを参考に
してやつてみようという形であつてこそ、比較するこ
と自体が意味をもってくる。他人のやりかたに学ぶ、
やりかたを参考にする、やりかたを盗む、ようするに
模倣することです。先人の切り開いた過程、お
おげさにいえば血の滲むような先駆けを追体験するこ
とによつて、始めて私自身の独自の色使いもでてる
のだよという意味合いになりますか。いろいろ表現の
仕方はあるでしょうが、言おうとしていることは同じ
でしょう。こういつてしまえば簡単ですが、これがど
れだけ大変なことか。やつてみればわかることです。

またさきほどの賢治の発するメッセージという点で
いえば、手紙の中に「楽しめるものは楽しみ、苦しま
なければならぬものは苦しんで生きて行きますよ
う」という言葉は何を言い表しているのでしょうか。

ここでは次のように理解しておけばいいのではない
でしょうか。すでに述べたように、他人から比べれば
小さな力かもしれないけれど、努力した結果としてあ
る成果ができた。とすればそれは当然嬉しいことだ
し、こころ弾む楽しいことです。その楽しさ・嬉しさ
を十分味わい、それをバネにしてさらに伸びていくこ
とができる、それはいつそう楽しいことだよというこ
とでしょう。

ところが、私がどれほど努力したところで、うまく
いかない場合だって当然ありうるわけです。そうした
試行錯誤のなかで、あるいは機が熟さずに世に受け入
れられずに、努力すること自体ばかりしくなるよう
な苦しさは往々にしてあるけれども、それはそれとし
て苦しむことのなかで鍛えられまた強くなつていくの
だから、苦しみのた打ち回るがいいというのです。そ
れもそんなに長く続くわけじゃないよ、他人事ではな

く自分自身が苦しみのた打ち回るところによつてしか、
次のこと―苦しみを超える足場、視点は形作られてこ
ない、見えてこないよという、これまで生きてきた彼
なりの人生の知恵みたいなものがここには裏打ちされ
ているのでしょうか。というか、二六歳の十一月も終わ
りに近い二七日、二歳年下の妹トシを喪い、火葬場が
火事で焼けていたために、野天で法華経を読みながら
焼き送るしかなかった賢治自身の狂おしいまでの哀し
みの日々がかさなりあつていたに違いありません。

私たちは楽しいことは望ましいこととしてみずから
求めることはあつても、苦しいことは御免だとばかり
に避けようとする。ところが、その苦しさは私たちの
望みや好みなどとは全くかわりなく訪れてくるので
す。たとえば、恋をする（特に失恋をする）・身近な
人（親しい人）を亡くす、信頼しきつていた人に裏切
られるなどは、私たちの思いや望みとはかわりなし
にどこか起こってくるものです。そんなときは思いっ
きり泣く、叫ぶ、苦しみつかれる以外にありません。
悲しすぎて・苦しすぎて・辛すぎて何にもする気がお
こらないときには、ただ何もできずに悲しむ、苦しむ
以外には手がありません。

それでも私たちが生きている限り、仕事をしたり食
べたり飲んだり寝たりしなければなりません。極端な
ひとつの話かもしれないませんが、たとえば、頸動脈を切つ
て自殺をした自分の息子が流した血の塊をばけつにふ
きとったばかりの台所で、（食べるための場所がなけ
れば）食事をするこゝだつてありうるのです。

一九九二年一月一五日、（いつの頃からか一月の第
二月曜日と変わっていますが）成人の日の休日でした。
朝七時頃かけられてきた電話に、「休みの日になんで
こんなに朝早くから」とつぶやきながら寝ぼけ眼で

みると、従弟が亡くなったのですぐに来てほしいとい
う、一足先に呼びだされた母からの話でした。とるも
のも取り敢えずかけつけると、ライトを点滅させたバ
トカーがとまつており、おまけに玄関口には綱が張ら
れ、警官まで立っています。その異様な様相を訝りな
がら、親戚であることを告げてなかにはいりました。
寝室の布団は血糊でぐしよぬれで、警察の検死がまだ
おこなわれていました。そこではじめて自殺だったこ
とがわかつたのです。医者だった彼は、失敗すること
のないようにと頸動脈を果物ナイフで切つたため、現
場の台所は血の海でした。いちはやく駆けつけた私の
母親と彼の奥さんが二人、壁板から、床板から血糊を
拭取っていました。彼の奥さんは茫然自失の体で、ふ
らふらしながら腕を動かしています。私はタオルを奪
いとして、ゼリー状に固まりかけた血をつかんでパ
ケツに入れることからはじめました。それがようやく
済み、遺体を棺に納めます。動転していてうわずつて
いる彼の母姉にかわつて、浮羽から駆けつけた従兄と
わたしは彼の同僚である医師たちと葬儀について打ち
合わせをせざるをえないことになりました。

そのとき、彼が留学先のアメリカ、アトランタの病
院で仕事にとまなう同僚とのトラブルから鬱状態にな
り、期間をはやめて一昨日帰国したばかりだという話
もはじめて聞かされました。帰りつくまで、誰からか
監視されているという意識がぬけなかったということ
も。そうした話しをききながら、明日の葬儀のときには
九大医学部関係者に手を貸してもらおうといったこと
で終えました。

それが済んだとき、朝早くからなにも食べていない
のに気づきました。こんな場面でも腹はすくのです。
身内だけが残り、食事がだされました、ついさきほど

まで、あのとび散った血を拭取り働いていたあの台所で。だが私たちは腹がへっていたがゆえに、そこで確かに食事をとったのです。血の臭いが染みついたように残る部屋、洗ってもすぐにはとれそうもない、あのゼリー状の血糊の感触がまだに残っている手を気にしながらも。

最初この場面で、とてもこの神経についてゆけない、なんと無神経な親だろう、息子の死の現場で食事をだすなど……、と思っただけでした。もつとほかにやりようがあるだろうが、べつの部屋にするとかの……。しかしそうとばかり言えないような気がしてきたのです。もし家をもっと広ければ、別の部屋でさせたかったでしょう、おそらくは。のこされた母親が、手伝いに来てくれた人びとに振る舞うために出前をとりよせ、まだ血の臭いのこもる台所でどんな気持で澄まし汁を作ったかを考えると、そう簡単には言い切れない。弔うためにきてくれた人に食事を出すという仕来りにしたがうという方向に無理にでも（一生懸命）気持ちを傾けなければ、今という自分を切りぬけることができなかったのではないかとも思いました。

凄まじい話ですが、それがほかならない私たち人間の生活なのではないでしょうか。これはひとつの極端な例かもしれませんが、生き残り、生活をしていかなければならないというのは、そういうことなのでしょう。生活する、時間が流れる、そうしたなかで人は少しずつではあれ、癒されていくのです。必ずしもそういった面ばかりだとは言いつてもいいかもしれませんが、そもそも時間がたつ、過ぎていく（こんなに悲しく苦しいさなかに、なんで煩わしくも、日々働き、仕事をしなければならぬのか、食べたり飲んだり寝たりしなければならぬのか、もろもろの人やものとやりと

りをしなければならぬのかと思つたとしても、それらをなすことなしには私たちは一日たりとも生きていけないようになっていく（ということは本当に有り難いことなのではないでしょうか。それで心身の苦しさを一時的にしろ忘れることができるし、また心身が慰められたり、和らげられたり、あるいは疲れ切つて苦しきなど忘れて寝入ってしまうといったことが起こってくるのですから。

そんな経験を通すことによつてしか、他人の痛み・辛さ・苦しさが身に染みてわかる。他人にこころの底から同感するということなど生まれてきようがないのかもしれない。こうしてはじめて、いままでまるつきり他人事であつたものが、他人事ではなくなつてくる。まるつきりの他人事ででしかなかったものが、この私自身の痛みとして感じられてくるのでしょうか。

このようなことをふまえて賢治は、「楽しめることは楽しみ、苦しまなければならないことは苦しんで生きて行きます」といつてゐるのではないのでしょうか。

(三)

いま私は、「風のなかを自由にあるけるとか、はつきりした声で何時間も話ができるとか、じぶんの兄弟のために何円かを手伝へるとかいふやうなことはできないものから見れば神の業にも均しいものです」という賢治の文脈にそつて、「神の業にも均しいもの」ということばの意味を考えようとしています。そこでつぎに、私が賢治の最後の手紙を知るきっかけとなつた滝沢克巳の『現代教育の盲点——宮澤賢治晩年の手紙によつて——』を手がかりにしなが、考えていこうと思います。

滝沢はいいいます。

ふつうに私たちは、私たちの「常識」や「科学的予想」に反して、ある幸いな出来事が、例えば「不治の病」の治療が、自分の身に起こるとき、そして、「理由」や「原因」はまったくわからないけれどもそれが事実起こつたということを否定することができないとき、それを「奇蹟的」だという。一般に事実の生起、その直接の知覚的確認は、その「法則」ないし「法則的認識」に解消することの永遠に不可能な、「存在」のひとつの極をなすとしても、「不治の病」の治療はなお、いつか意識的にくり返される操作と化することもできるであろう。しかし、人間的主体そのものの成立・自己存在の事実そのものは、いかなる人も、けつして、自己の主体的なはたらきによつてこれを産み出すことはできない。事柄そのものの順序からいつて、まず「人間的主体」として成り立つて来なければ、そしてそのつど自己として事実存在するのだから、その「人間的主体性」にいかなるはたらきも起りようはない。人間的主体の成立、自己存在の事実そのものには、「意識」というにせよ行為と呼ぶにせよ、人間の主体的な作用（「人間的自由のはたらき」を、ただ単純にかつ完全に拒絶する何ものかが含まれている。いいかえると、全然主体的ではないということ、主体として自由にはたらくなどということとは**元来できないもの**だということこそ、実際に人が人であること、人として生きるこ

とを現実にも可能ならしめる **根本的な条件** なのである。⁶⁾

、と。

私が現に人であること、人としてこの世に存在するという事実は、「科学的に知覚・検証し得る」なにかの「根拠」、歴史のなかに産み出されたもう一つの「価値」にもとづく「理由」によっても基礎づけることができないという。そうした「根拠」や「理由」をどれほど積み上げたところで、そこから、この私がここに存在するという事実はではしません。しかしたとえば、両親が私を産んだということで、三億分の一の可能性であっても、私が存在（生命）するという事実に人が関与したといえるのではないのでしょうか。そしてさらに、私の存在（生命）を追い求めて歴史的にどこまでも遡及していくとすれば、私が生まれてくる可能性はかぎりなく零に近くはなるものの、まるつきり零ではないはずで、だからどれだけ零に近いといっても、それだけの「根拠」や「理由」はあるといえます。

ところが仮に百歩譲ってそう考えたとして、限りなくどこまで遡っていつてみても、そこから私の存在の事実がでてくるなどということはない。なぜなら、確かに両親は私の生命がこの世に存在するための条件を作り出したといえます。ところがそれで私の生命が作り出されたわけではない。端的にいえば、精子と卵子が適当な条件のもとに出会えば生命はぐくまれるという事実があつて（両親さえ、あるいはこの世に存在するすべての人の誰もが関与することのできない）、その事実に基づいた結果として私がたまたまここに生命を受けて存在するのです。このような意味において、

たとえ両親といえど、私がここに存在するという事実を生みだしたわけでもないし、またましてやこの存在（生命）はこれこれの働きをするものであるようにと考えて産みだしたわけでもありません。ここに人として生きているという事実は私たちの誰一人として自分の「業」によって、「作られた」のではない。私たちの誰一人としてその由来を知らない生命がここに存在するという事実がそれとしてある。そうするとそれは必ず、あれこれのことを考えたり語ったり、見たり聞いたり、立ったり歩いたり、食べたり飲んだり、作ったり生産したりするようになっていく。そもそも始めから人間の主体的に働くことができるように「造られている」、「決定されている」としてしか表現しようがないことなのです。人間的な自由とか働きによらない、ただ受けて立つほかない出来事、生まれてみたら、気がついたら、そのようなものとしてこの世に生を受けていたのです。

このような意味で生命の始まりにおいて、人間の主体的な「働き」によらない・人間の主体的な「働き」をこえた、絶対に人ではない「神の業」によるとしか表現しようのない事実がある。まさに起こりえないことが起こった、「奇蹟」というほかないことです。見えざる「神の息吹をうけて」としか言い表しようのない事柄です。それを、私たちはただ単純に喜び、受けるほかない。起こりえないことが起こった、ただ有り難い、と慎んで感謝するほかない。

宮澤賢治は『イーハトボー農学校の春』で、つぎのように述べています。

わたくしたちが柄杓で肥を麦にかければ、水はどうしてそんなにまだ力もいれないうち

に水銀のやうに青く光り、たまになつて麦の上に飛出すのでせう。また砂土がどうしてあんなに、のどの乾いた子どもの、みずを呑むやいに肥を吸い込むのでせう。もうほんたうにさうでなければならぬから、それがただひとつのみちだからひとりでもさうなるのです。⁷⁾

一つの生命があたえられるということは、その生命を生きぬく力があたえられているということです。「もうほんたうにさうでなければならぬから、それが（生命が生命として存在していくための）ただひとつにみちだからひとりでもさうなるのです」たとえば米を作ろうとすれば、早場米でないかぎりそして手植えでしようとすれば、だいたい五月の初旬に籾を塩水で選別します。それから五日後ぐらいに籾播きをし、その四十数日後に田植をするといった手順をとります。その間にももちろん、代掻きや元肥などの肥料撒きなどがあります。こうした場面から見ると、籾自身の生命力はそれとしてなければならぬとしても（そのために充実度の高い、強い生命力を持つている籾を選ぼうとして、塩水選をおこなうのです）、人の手によって守られ、育てられ、管理されることなしには生育することができないように思えます。

しかし人の手によって籾が土中に播かれ、一定の湿度と温度、日光があたえられると、籾自身に備わる（与えられた）生命力によって根を出し、葉を出し……というように育っていく。さらにそれが十五センチぐらいに伸びて、田の泥土のなかにおかれた瞬間から、稲自身にもともと備わった力によって根は土を捉え、水を体内に取り込み（浸透作用）、籾は水を葉に吸い上

げ送り（毛細管現象、蒸散作用）、葉は太陽に向かって広がり伸びて光合成をおこない、みずからの生命維持・成長のために炭水化物を作り出すのみならず、他の生物の生命維持に必要な不可欠の酸素を生み出しさせる。稲は稲、土は土、水は水であるままで、稲は土に、土は水に、水は稲に關係し（を含み、に含まれ）……というように共生關係に支えられてぐんぐん育っていく。他に含まれ、他を含み、こうした他と関わり合うことはみずから生き活きと生きるための必要不可欠の条件なのです。「もうほんたうにさうでなければならぬから、それがただひとつのみちだからひとりでどんどんさうなるのです」と、いわれている通りです。不可視ではあるが、ここにいます神の「業」Ⅱ

「奇蹟」によって、神の息吹を受けて始めて存在するもの、働くもの、しかもそれも互いに支え支えられる關係を不可欠の条件としてはじめて、ここに生きるものとなったといえます。

したがって滝沢は、「風のなかを自由にあるけるのか、はつきりした声で何時間も話ができるとか……」といったことだけが「神の業にも均しいもの」であるのではなく、一人の人が（一つのものが）ここに事実としてあること、人として（ものとして）生きて呼吸しつつあるということそのこと自体がすでに「神の業」であり、「大いなる奇蹟」なのだというのです。とすれば、賢治の「神の業にも均しいもの」という表現はなんともまだるっこしい、更にいうなら正確ではないといわざるをえない。滝沢は賢治にたいして批判めいたいい方をしてはいませんが、賢治のそうした点を見ていたことは確かでしょう。なぜなら賢治のこの言葉に言及したすぐ後で、彼は賢治の言葉「神の業にも均しいもの」を人ではない「神の業」だとはつき

りいいかえています、強調点までつけて。

この時の賢治のように、不幸にしてふつうの人ができること、「風のなかを自由に歩いたり、はつきりした声で何時間も話をしたり」することさえできなかった人であっても、いいかえれば、「立ったり歩いたり、見たり考えたり、語ったり作ったりする」ということができない、あるいはできなくなった人であったとしても、一人の人として生きて息をしているということそのことによって、何ものにも替えがたい生命なのです。人は人の業ではない、神の息吹き（支え）を受けて初めて働くものとなった。こうした意味で私たちの生命は全面的に肯定されている。

この絶対に消えることのない、なくなることのない愛、安らぎのうちに、いまここに与えられている生命力を出し切って生きるようにという願いと促しにつつまれている生命なのです。だからこそいかなる人であれ、どんなに小さなこと、弱々しいことしかできなくても「現在の完全な生活をば味はふ」ことができるのです。「現在の完全な生活」とは、小さく弱々しい現在の私がいっか力をつけて「完全な生活」を実現できるようになるのだとか、実現するつもりだとかいうのではありません。ほかならないいまこの瞬間、わたしたちの生命の一瞬一瞬が「完全な生活をば味はふ」とこのできる「現在」なのだよ、というのが賢治の言葉の意味するところではないでしょうか。こうした意味で生命が全的な肯定をうけているということに、さき

といった）という何ものにもかえがたい経験、私たちがみずからの記憶にとどめてさえいないけれど身体の深部には確かに息づいている経験、ひとの側での働きかけ（ひとに働きかけ働かかけられるという、まったく未知の世界にのりだしてゆくための、いちばんの根もとの安らぎ）が裏打ちされることによって、将来私

がどんなに苦しく堪えられないほどしんどい状況に陥ったとしても、最後のぎりぎりのところで生きることへの・ひとへの信賴を失わないですむといえるのではないのでしょうか。

いちおうここで終わればよいのですが、読み返してみると、（二）のi、「憂悶病」へ傾斜していくことゝの最後の部分で、賢治がほんのちよつとした加減（拍子）で知らず識らずのうちに「たまたま他人より優れたことができた自分を喜ぶあまり、他人以上のものがあるかのように思い、また他人より劣ったことしかできない自分を悲しむあまり、他人以下のものであるかのように諦めてしまう」という傾きに目を止めていること、さらに滝沢はそれを「積極的に実在する何の根拠もなしに、まったくの虚無から人間におこってくる虚栄」とよんでいることを指摘し、その何かについてはのちほど触れるといいながら、ここまでの過程でなんら取り扱っていないのに気がつきました。それで、ここであらためて取り上げることになります。

私たちの生命をいかなる一瞬もつかんで離さない（全的な肯定のうちに）みえざる働きがあること、その働きがひとの親による新たな生命への全的な受け入れ（全的な肯定）とあいまった時、私たちは将来どんなに苦しくしんどい状況に陥ったとしても、生きることへの・ひとへの信賴を失わないですむのではないかと述べた。しかし、後者の肯定、「お前はいままでいい

んだよ」ということだけでは不足だ、私がこの世で胸をはって歩いていくためには、もっと目にみえるかたちでの大きな力なければと思い、それがたまたまなかの拍子に実現できれば、喜びのあまり有頂天になり、ひと以上の何様になったかのように錯覚してしまうのです。またそれが他人より小さくて、劣っていれば、もうこの世で生きていけないかのごとくに思ってしまう。そうしたことが起こってきます。そんなところで分けもわからない間に足をすくわれてしまう。自分自身がそこで振りまわされてしまうのです。あるときは躁状態で明るくはしゃぎまわっているかと思えば、いつの間にか鬱状態でいまにも生命を奪い取られるかのような暗い顔つきをしている。そうするとまわりにいる、これまで仲良くしてきた友だちや仲間、脈絡のつかない私の言動をはじめは憐れみつつも、どこか傷つけられたり腹をたてたりすることが度かさなつてくると、結局「あいつはどうしようもなくつまらない男だ」とひとりで離れていってしまいます。

これはどう言い訳しようと、まったくの私自身の責任です。結果的にあるいは集約的にそれらの傾きを、「ただ啗うべく憐れむべき人間の虚栄」ないし「原罪」と呼ぼうとも。ほかならない私自身がそんなことで有頂天になってしまい、あるいはみずからを悲しむあまりにいと簡単に足をすくわれて、自他のあいだにいたかも超えることのできない壁が存在するかのように錯覚してしまっただけです。

否、これも正確な表現ではないかもしれませんが。というのは、私自身について、全ての責任性を強調するほど私自身がわかつているのか、それらすべてを背負えるほどのお前は存在なのかということが、ひとつ大きく残る。つまり、さきほどからなんともいっている

ように胎内に赤ん坊がいるときから三歳前後における母子のかかわりの問題です。ここではそのかかわりにおいて新しい生命が肯定的にうけいられない場合をかんがえてみたいと思います。たとえば母親が経済的な事情からだとか父親との関係だとかにおいて、「この子を産みたくない。どうしようか。」と思いつづけていたとします。そうした揺れる思いはお腹の中にいる子どもに確実に伝わっていく。また産んでからも、お乳を含ませながらどこか身構えながら心ここにあらざりというように授乳しているとすれば、そうした母親の心身の硬さは端的にお乳のぐあいのわるさとなつて、また赤ん坊からすれば母親への抱かれごこちのわるさとなつて現れていくはずで、お腹がすいているにもかかわらず、母親が全心身をひらき向かい合おうとしないから、お乳のではわるい。そうしたことが度重なると赤ん坊は、みずからの生命の糧である母乳すら口にすることを阻むといわれています。このように母親の心身の揺れは確実に子どもにすり込まれていきます。

こうした母親の心身の揺れ（苛立ち、動揺、恐れ、慄き、怯え、緊張、不安）が胎児に、さらには三歳ぐらいたいまでの育児過程にある乳幼児にすり込まれるという話を、吉本隆明が『時代の病理』（春秋社）という本のなかでしています。聞き手としての田原克拓（カウンセラー）の出したケース「T・Kさんの手紙」にふれて、相談者T・Kさんがひととたいするとき無意識のうちに身構えてしまう、ひととの関係のなかでもわず心身を硬くしてしまうというありようの根っこには、T・Kさん自身にも意識されていない部分で、こうした母親との関係があるのではないかという指摘です。くわしくはその本を読んでもらうしかないので

すが、ここでは母親がお腹のなかにいる胎児、あるいは乳幼児の生命を心から喜ぶことができなかったという事実を問題にしようと思います。そこで吉本隆明は、「母親が、たとえば夫との関係でも、あるいは経済的な不如意というか窮乏のため、いつでもなにか身構えながら乳児にたいしてお乳をあげていたということがずーつとあると、体を硬くしちゃう身構えというのはその時に形成された部分があつて、それはどうしても無意識なものだからじぶんではわからない」と、分析しています。⁽⁸⁾母親が夫との関係、経済的な問題などに気をとられ、心痛めるあまり、自分の子どもに本心から向かえなかった、その生命を喜べなかった、肯定することができなかったということでしょう。母親の心身がほかの何かにとんでいた、占められていた、痛められつづけていた。母親の身体と心が芯のところではつとる、なごむということがなかった。これが「母親の緊張、身構えが子どもに伝わった、刷り込まれた」ということの意味だと思っています。子どもであるT・Kさん自身がたとえば、「友だちがあのと私にこんな仕打ちをしたからだ」とか、「あんなふうに教室で傷つけられたからだ」とかいのように、自分で気づくところだけを掘っていたんでは説明できない問題でしょう。

こうした自分でもはつきりすることのできない関係をわからぬままに背負いこまされ、さらには親から離れ独り立ちして歩かなければならないという、児童期以降誰しもがかかえこまざるをえない存在不安のなかで、T・Kさんの緊張はいかばかりだったのでしょうか。そうしたなかで、自分自身を必死に保つために、なにかが他人よりできたといつては有頂天になつては喜びすぎるあまり、自分ひとりを高しとして悦んでいる。ま

た他人よりできないといつては「もう駄目だ。生きていけない。」などと、みずからの生命を諦めてしまう。

絶望に打ちのめされたとしてもなんの不思議がありません。しょうか。こんなことがお前には少しもなかったのか、とみずからを振りかえってみることもできるはずだ。

とすれば、私自身の意志決定、選択、あるいはその責任だなどという領域はふつういわれているように、そうはつきりしているわけではないのかもしれない。だから、たとえば「親の因果が子にたたり」といわれるように、個々人の責任だけを穿つていたので、どうにも説けないことがでくるのです。それは親子という縦の関係だけに生じることならではなく、私とだれかとの、なにかものとの横の関係においてもまた問題とされてくることもあるはずだ。そうすれば、滝沢のいうように「ただ啗うべく憐れむべき人間の虚栄」、「原罪」と集約的に表現するほかないのかもしれない。だからといって滝沢は、個々人の責任性を曖昧にしているわけではけつしてない。それははつきりいつておかなければならぬことです。

ただ私がさきほどからぐだぐだいつているようにみえることは、そう表現しきることによって「啗われ憐れまれる」側である人間の個々のつまずきがなにか軽くなつてしまふ、問われる度合いがそこで拡散してしまふような気がしたからです。しかし、先ほどからいつているように、どれほど私の責任などといいきる領域がそうはつきりあるわけではないし、極めて狭いかもしれないけれど、私の生命をどのように感じ、生きるか（肯定的にあるいは否定的に）ということは、ほかの誰でもなくこの私が選んだ私自身の生命に対する私自身の感じ方に違いありません。それでちよつとこだわっているわけです。ほんとうはそれほどこだわらな

くてもいいのかもしれない。

(二〇〇一・二・二四)

〈註〉

- (1) 校本『宮澤賢治全集』第一三卷（筑摩書房）書簡番号二七七によれば、資金調達趣意書まで作成してくれた賢治に、鈴木東蔵が大きな期待を寄せていたことがうかがわれる。資金繰りの件で東蔵から相談を受けていたものであろう。賢治は父政次郎や盛岡銀行専務宮澤恆治、湯口村村長阿部晃などへ、話しをたびたびもつていったのでしよう。不況のために調達がうまくいかないこと、賢治自身が父政次郎との関係がまずくなっていることなどの理由をあげて、断りの手紙をだしています。
- (2) 驚田清二「悲鳴をあげる身体」（PHP新書）P・七一、「聴く」ことの力——臨床哲学試論——（TBSブリタニカ）P・一七七
- (3) 小浜逸郎『大人への条件』（ちくま新書）P・一四三—六
- (4) キエルケゴール『死に至る病』（岩波文庫）P・一〇七
- (5) 滝沢克巳『朝のことば——学ぶこと・考えること——』（創言社）P・九五
- (6) 同上 P・八六
- (7) 校本『宮澤賢治全集』第九卷（筑摩書房）「イーハトーボ農学校の春」P・三二
- (8) 吉本隆明・田原克拓『時代の病理』（春秋社）P・八一